

化学物質過敏症への理解と協力を

分かりやすい医療の話

MEDICAL LECTURE

Doctor
今月のドクター

指宿医師会 熊本 俊則



私たちの身の回りには、さまざまな化学物質があふれています。農薬、殺虫剤、防腐剤、塗料、香料、合成洗剤、排気ガス、タバコの煙など、生活のあらゆる場面に化学物質が存在しています。私たちは、これらの化学物質を避けて生活することはできず、大量に暴露すると、人体に害をなします。

防腐剤や塗料、殺虫剤などで気分が悪くなった経験がある人は、たくさんいると思います。また、新築や改装、新しい家具を購入したときなど、建材に含まれているホルムアルデヒドやトルエンなどで頭痛、体のだるさ、吐き気、不眠、アレルギーなどの症状が起こり体調不良になることがあります。これを

シックハウス症候群といいます。このように、大量の化学物質に暴露したり、少量でも長期的にわたって接したりすると、一般には感じないほどの微量の化学物質にも反応するようになり、さまざまな症状が現れて、体調不良になってしまうことがあります。これを「化学物質過敏症」といいます。

なぜ、このようなことが起きてしまうのかは、未だ説明されていませんが、人体には化学物質に対する許容量があり、これを超えてしまうと、症状が出現するとされています。また、許容量には個人差があり、その許容量を超えると、引き金となった化学物質のみでなく、多くの化学物質にも反応するようになるといわれています。

化学物質過敏症は、誰にでも発症する可能性があります。昨日まではまったく異常がなかったのに、ある日を境に突然発症する花粉症。化学物質過敏症もこれと同じように、突然、発症します。一部の専門家は、近年、発症者数が増加傾向にあると言います。

化学物質過敏症は、目、耳、

鼻、のど、消化器、循環器、自律神経、筋肉、皮膚など、体のあらゆる場所に出現します。筋肉痛あるいは筋肉の不快感、持続する倦怠感、疲労感、関節痛、持続あるいは反復する頭痛、咽頭痛、微熱、下痢、腹痛、便秘、羞明、一過性暗点、興奮、精神的不安定、不眠、皮膚のかゆみ、月経過多など、症状もさまざまです。軽度の場合、身体の疲れや軽い風邪、更年期障害などの鑑別が難しく、中には「原因不明」として放置されている潜在患者も多数いるものとみられています。的確な診断ができるのは、全国でも数施設しかありません。

対策としては、化学物質を回避することに尽きますが、完全に回避することは困難です。発症予防の点からも化学物質の使用をできる限り少なくしたいものです。私たちの周りにも、化学物質過敏症の人がいるかもしれません。

好き嫌いの問題かもしれませんが、公共の場など、人が集うところでは、タバコはもちろん、香料なども控えるようにしたいかがでしうか。